紳士の心得として、リゾートには白のタキシードを忘れるべからず。

外交ジャーナリスト・作家として世界を駆け巡り、取材に、執筆に、テレビ・講演にと多忙を極める手嶋龍一さん。「ほんとうは旅行作家になりたい」という。それほど旅の達人でもあるのです。おなじみのソフトな語り口で明かす旅の秘話は、まるで映画のストーリーを見ているような気分になります。それほど知的で刺激に満ちたひと時でした。

外交ジャーナリスト・作家

手嶋龍一

Ryuichi Teshima

バケーションは休暇でない 人脈づくりの宝庫と肝に銘じよ

田村　手嶋さんは「さまよえるライター」と言われているそうですね。それほど旅を重ねておられる。手嶋龍一流“旅の極意”を教えていただけますか？

手嶋　旅はそれぞれの人生を映す鏡です。ジャマイカのモンティゴベイでクリスマス休暇を過ごしたときのこと。プライベートビーチでロアルド・ダールの『オズワルド叔父さん』（早川文庫）を読んでいたら、隣の毛むくじゃらな紳士が「君は危険極まりない本を読んでおる。気に入ったので今夜のパーティーに招きたい」というのです。ヒマは持て余している。「喜んで」とお受けした。

「君は白のタキシードを持っているんだろうな」というのです。その紳士は用意がないとしるや、「君は休暇というものを間違って考えている。休暇とは単なる楽しみじゃない。だから、フォースド・ヴァケーション、つまり強制され

た休暇という単語があるんだ、というのです」。この毛むくじゃらの説教によれば、どんなに活動範囲が広い人でも、日常の暮らしでは交友はたかが知れている。休暇先で見知らぬ人と遭遇する。それによって、人脈の核爆発が起こり、新たな金鉱脈が手に入るのだという。「だから、ホテルの選択も、愛人を選ぶときのように慎重でなければならんのだ。夏のリゾート地でも新たな出会いに備えて、白のタキシードくらい持ってこなければならん」。なるほど、武士の心構えかと感じ入りました。

田村　それで手嶋さんの衣装はどうなったのでしょう？

手嶋　毛むくじゃら氏は「自分は2着用意してあるから、君に貸そう」と言うのです。借りたタキシードの裏地には“メイド・イン・サウス・アフリカ”と縫い付けてありました。当時のサウス・アフリカ政府は極秘の核開発を進めていました。このユーゴスラビアの実験核物理学者は、核プロジェクトに加わっているんだと見立てたわけです。

田村　そうした出会いは、手嶋人脈をさぞかし豊かにしたのでしょうね？

手嶋　この謎の核物理学者との友情はその後も続いています。ニューヨークの高級フラットにも守護聖人の祝日に招かれました。彼がジャマイカでどれほどの美形と過ごしていたかなどと、野暮なことは口にしませんからね。

手嶋龍一（てしまりゅういち）

外交ジャーナリスト・作家。
NHK記者時代から外交・安全保障問題を一貫して担当。ワシントン特派員としての取材をもとに、日本外交の迷走ぶりを描いたノンフィクション作品『たそがれゆく日米同盟』『外交敗戦』（いずれも新潮文庫）が注目され、ハーヴァード大学国際問題研究所にシニア・フェローとして招かれる。その後、ドイツのボン支局長を経てワシントン支局長を8年間にわたってつとめる。同時多発テロ事件では、11日間連続の中継放送を担った。2005年にNHKから独立し、インテリジェンス小説『ウルトラ・ダラー』（新潮社）を出版。小説に描かれたストーリーが次々に現実の出来事となり、ベストセラーに。知られざる世界の最深部へ、明晰な文体で読者を誘う手法は、さながら「ノン・フィクションの狙撃手」。経済大国ニッポンは、新たな「インテリジェンス大国」を目指すべきだと訴える気鋭の論客でもある。

心そそられる宿には かならず旅慣れた 旅人が集まってくる

田村　手嶋さんはどんな場所を旅するのがお好きですか？

手嶋　ささやかな経験では、島がなんと言っても面白い。島には心温まる、親切な人が多いのです。アイルランドやシチリア、すべてそうでした。シチリアには素晴らしい料理旅館がいくつも点在しています。

　最も気に入っているシチリアの宿があります。着いたとたんに「すまないが、予約の電話が入っている。英語はどうも好かん。代わりに予約を受けてくれ」といきなり言うのです。ドイツからの宿泊申し込みでした。それがおわると、すり身を手伝えというのです。なんともシチリー的なおおらかさなのです。

　オリーブを潰す臼をテーブルにしていて、泊まり客は一緒に食事をする。こうしたシチリーの料理旅館を経巡る旅はたまらなく楽しいですよ。旅慣れたイギリス人の友人にも勧めたのですが、生涯で一、二を争うほどいいところだと感激していました。

田村　勝（たむらまさる）

博報堂・アカウントディレクター。ヨーロッパ政府観光局の広告・PRを長年担当。日本オクトーバーフェスト推進協議会主幹。立教大学卒・早稲田大学大学院在

田村　ユニークでお洒落な旅の経験をたくさんお持ちの手嶋さんですが、旅の情報（インテリジェンス）はどのようにして仕込むのでしょうか？おそらく読者が最も気になることだと思うんですが（笑）。

手嶋　情報は等価交換が鉄則です。旅慣れた、ちょっと変わり者は類を呼ぶのです。宿で「こんどはイタリア半島のかかとに行ってみようと思うのだが」と持ちかけてみます。いい旅人はいい情報を懐に隠し持っているものなのです（笑）。こちらも、お返しを用意しておかなくてはいけません。さしずめ、京都・祇園のもち札などはどうでしょう。一見さんお断りは彼らとて知っています。

旅人との触れあいに最も大切なのは語学などではありません。その人が歩んできた人生の味が滲み出ていれば、それで十分です。かならず新たな友情が生まれます。

世界29都市を巡る お洒落な旅体験

田村　手嶋さんの新しい本は、個性的な旅のストーリーと伺いました。

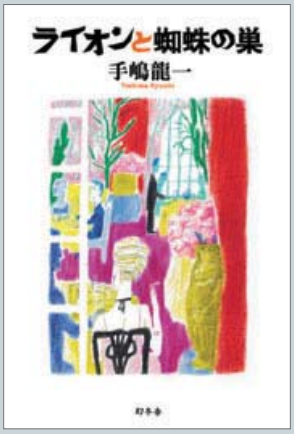
手嶋　『ライオンと蜘蛛の巣』がタイトルです。アームチェア・トラベラーズのための本なのです。つまり、本を通じて旅を楽しむ人たちのために書いた作品です。世界29都市を僕が足で経巡って書きあげました。旅先で出会ったさまざまな出来事と人がない交ぜになっています。ひとつだけ紹介しておきましょう。イタリアのフィレンツェ郊外にあるヴィラ・サン・ミケーレ。5ツ星ホテルのリゾート・ホテルでの出来事です。ヴィスコンティ監督の名画『山猫』に出ていた若き日のアラン・ドロンのような、野性に溢れた男性をダイニングルームで見かけて、おやと感じたのです。彼には年上の美貌の連れがいたのですが、彼女から決して視線をはずそうとしない。「ああ、プロフェッショナルかもしれない」とにらんだのです。私を含めて、他の男たちは美しい女性客が現れると一斉に視線をそちらに向けてしまう。だが、この男だけは、決して瞳を向けようとしない。こうした旅の断片が、29都市分、つまり29篇つづられています。そこに行ってみたいという読者のために地図とイラストもつけておきました。つまりリアル・ストーリーなのです。

田村　その中には東京も入っているのでしょうか。

手嶋　この頃、つくづく思うのですが、東京は大変面白い街だと思います。未開の、そう、アマゾンの街マナウスのような―。

この本には六本木も出てきます。『ウルトラ・ダラー』の本を出したときに、主人公のスティーブン・ブラッドレーと読者を結ぶ「スティーブンズ・クラブ」を作りました。そこに「知りたがりやのジョージアより」と記された、こんなお手紙が舞い込んできました。「本を読んで以来、六本木のけやき坂でイギリス人を見かけるとみんな英国秘密諜報員に見えてしかたがありません。見分け方を教えてください」というもの。このお手紙へのお便りもしたためました。

田村　この本の登場によって手嶋さんのもうひとつの素顔が明らかになって、また新たな読者が増えそうですね。私も自宅のリビングで、アームチェア・トラベラーズとなります。ありがとうございました。



『ライオンと蜘蛛の巣』

外交ジャーナリストの手嶋さんが道案内となり、大人のお洒落な旅がはじまります。世界29都市を巡る極上のエッセイ。本を閉じる頃には、スーツケースをあけたくなります。
幻冬舎（本体価格1,500円＋税）